

# 子規會誌

一  
号

昭和五四年  
四月

「松山子規会」三十七年の歩み

越智 二良……………一

「子規全集」編集を終えて

駒井 皓二……………五

子規と須磨・奈良と柿

村上 春次……………一三

子規と寺田寅彦

弘田 義定……………二七

## 例会記録

### 十二月例会(第四三二回)

昭和五十三年十二月十九日(火)  
正宗寺 出席三十七名

蒲屋薫幹事の司会により開会。会長はいさつの中で「霽月句文集」について紹介。

講演 子規と須磨・奈良と柿 会員村上春次氏

散会後役員会を開催。会計年度を変更して四月から翌年三月までとすること、したがって、総会は四月例会のときに開くこと、一月例会の際は懇親会だけにすることを決定。さらに、二年間つづいた「子規会報」を発展的に解消して、五十四年度から「子規会誌」(季刊、三十二ページ、タイプ・オフセット印刷、四月創刊)を発刊することを決定。編集委員に弘田義定・和田茂樹・越智通敏の三氏を選出、編集事務は越智通敏が担当することになった。

### 一月例会(第四三二回)

昭和五十四年一月十九日(金)  
愛媛県生活文化センター 六十八名

和田国高幹事の司会により開会。会長はいさつの中で、会計年度を四月からとして総会を四月例会の際に開くこと、「子規会誌」を四月に創刊することを述べると

ともに、「極堂俳句稿」ならびに俳誌「星」(吉野義子氏主宰)の紹介をせられた。

講演 子規と寺田寅彦 会員弘田義定氏

講演につづき、会員山崎保胤・和田茂樹両氏の愛媛教育文化賞受賞の祝賀を兼ねた年頭恒例の懇親会に移り、金村副会長の祝辞、山本富次郎幹事の発声による乾杯のあと、なごやかに懇談。

### 二月例会(第四三三回)

昭和五十四年二月十九日(月)  
正宗寺 出席五十六名

蒲屋薫幹事の司会により開会。会長はいさつの中で、伝記「正岡子規」が松山市教委から発行されたことを紹介したあと、二月が忌月にあたる碧梧桐(一日、六五歳)・霽月(一五日、七八歳)・鳴雪(二〇日、八〇歳)のことに触れられた。

講演 霽月と勝田明庵 会員足立修平氏

終わって会長から鳴雪・碧梧桐のあれこれについて談話があつて閉会。

終了後役員会を開催、既刊子規会双書三冊についてその後の頒布状況について報告、四月発行の「子規会誌」創刊号の内容、部数、発注先などについて協議。

## 「松山子規会」三十七年の歩み

会長 越智 二良

「俳聖正岡子規を敬仰、其の遺業を不朽ならしめ且郷土に於ける子規系巨星の事蹟を研究するを以て目的とす。(会則第三條)」として松山子規会が発会したのは昭和十八年一月十九日であった。

子規の研究と顕彰に生涯をかけた柳原極堂(以下敬称略)が、東京から疎開して松山に帰ったのはその前年の十月、県立図書館長菅菊太郎の求めに応じて同館読書会で子規の生涯とその事蹟を語るとともに、郷土の人々が子規について関心が薄く、ほとんど知るところがないのを遺憾とし、その認識を深め顕彰につとめたいと強調した。これが動機となって識者の間に子規会結成の声が高まり早急に実現を見るに至ったのである。菅図書館長を初代会長に推し、館内に事務所を置いたが、子規研究に限られた会であるにもかかわらず入会者が相ついで。

極堂は会員自署名簿の巻首に「はしがき」として『在りし日の居士に親炙し、これを師としこれを友としたる、生ける居士をその脛に刻みぬる人は年々に逝いて乏しくなり、生前

の子規居士を記憶から呼び起し、そを如実に語り得る人は今はいくばくもなしちわれらそこに一抹の寂寞と無常を感じざるを得ず」と記しているが、発会当日の出席者中には極堂をはじめ五州西原武雄、小川尚義、岩崎一高、村上霽月、稚桃景浦直孝、西園寺源透らがあり、その後円月森次太郎が帰り、世南内藤五郎は周桑郡吉井村から出席するなど、生前の子規を知る人がまだ幾人もいた。「月々その命日をもって正宗寺なる埋髪塔に展じ、ついで子規堂に団樂し、かつは居士を偲びその逸話文献遺跡などにつきて語り合ひ、これを記憶に留めいくらかなりと郷土における偉人の面影を後世に不朽ならしめる」という趣旨で、毎月の例会には十数名が集まって旧知の追懐談を聞いた。一年後の十九年二月、子規堂(戦災で焼失)前の記念撮影には菅会長・極堂・稚桃はじめ二十五名が写っている。

十九年九月には正宗寺本堂に遺墨展を開き霽月撰書の子規記念碑が建立されるなど、戦時中にもかかわらず順調な発展を見ていた。ところが、二十年七月大空襲で松山は全市焦土

と化し、正宗寺も子規堂も烏有に帰した。しかし、例会は戦災の翌八月を一回休会しただけで、会場を道後義安寺に移したが、十二月からは正宗寺仮本堂で開会、このころ極堂が三津古深里洗心庵に転居したため兩三回三津で開会、その後は再び正宗寺を会場と定め、二十一年九月、会事務所を図書館から同寺に移した。同年十二月には現在の子規堂が完成、極堂がここに居を定め例会も子規堂で開くことになった。しかし、終戦後の混乱時代として例会出席者も少なくなり、二十四、五年ころには集まるもの数名で開会できず、歓談して解散することもしばしば、極堂は振興策に心を勞した。

菅会長は晩年長らく病床にあったため副会長制を設け、山本義晴が推されたが、山本は二十三年十月病没、越智二良がこれに代わった。そして、菅会長は二十五年五月逝去された。これより先、二十四年六月、極堂は二年半住みなれた子規堂を出て近くの法竜寺地内に建てた新居子規庵に移り、以後例会もここで開催する例となった。菅会長の逝去により後任には顧問景浦直孝が満場一致で推選され、極堂の懇請を容れて受諾された。事実上の創立者である極堂は最初から表面に立つことを好まず、終始背後にあって会の運営に熱心に尽力した。怠慢がちな役員らにまかせ切れず、みずから会員名簿の整理、会費の徴収、講師の依頼交渉から案内状の発送、席料の心づけ、湯茶木炭の調達まで、物資不足の時代として細心の注意を怠らぬありさまであった。会の経理も窮迫甚だしく、

歌碑が各地に建ったが、子規会の名をもって建立したのは山越千秋寺境内の句碑とこれの二基だけである。五十年祭は県市その他の協賛を得て盛大に挙行され、以来市民の子規に対する関心は大いに高まった。

会則改訂に端を発して会の運営方針などにつき景浦会長と極堂は意見相格、感情疎隔の兆しがあったようだ。そのころ、景浦会長が例会で赤穂義士の講話を試みた。松山藩が預った浪士中に俳人子葉大高源吾があり、当時の藩主定直や老臣が芭蕉・其角らと交渉のあったことなどに因るのであるが、一部に子規会で赤穂義士の話とは何事ぞなどの声があった。その後極堂は五十年祭をもって本会の目的は一応達成したという理由で突然子規会解散を提議するに至った。これは例会に諮った結果、立花美考の『子規が永遠に不滅である限り、子規会もまた永久であらねばならぬ』と声涙ともに下る熱弁に動かされ全員挙って存続を決議した。たまたま子規・漱石同居の旧跡愚陀仏庵復興計画が再燃し、その趣旨、建設位置などについて極堂と稚桃の意見が対立、極堂は三十年七月今後子規会には出席せずと唱え、各方面へ子規会の脱退、絶縁を書き送ったりした。この間が子規会にとって一種の危機時代であったといえよう。しかし、極堂と子規は一体、子規会とは不可分である。例会は何らの影響も受けず平穩に続行され、極堂も自ら講師の依頼その他陰に陽に尽力して変わるところがなかった。やがて両者の感情も融和、極堂は三十二年十月、

案内用ハガキが十五銭から五十銭になった当時、年額二円の会費を十円に、二十三年十月三十円、ハガキが二円になった二十五年七月百円に増額したが、時にはハガキ代にも困る状態であった。

新会長就任の年七月、極堂は、役員に望むとて、子規会あてに、全国各方面から子規に関する照会が多い、これに応答するため研究部を設け資料の調査研究に当たること、年四回以上会報を発行することなどを要望した。翌八月例会で景浦会長起草の会則改訂案を決議した。これが現行のもので、これには『本会は子規居士を始め歌人俳人の文績並に弘く文学の変遷発達について研究を遂げこれら諸先哲の文績を顕彰し併せて景慕欽仰の意を寓するを以てその目的とする』となった。趣意は従来のもとは大差ないのであるが、発会当時の端的な子規中心の文章に比し字句表現が拡大緩和されたことが極堂の意に満たなかったらしい。

この年は、翌二十六年の子規五十年祭を前にして、子規会は伊予史談会と提携して盛大な記念行事の開催を県市に働きかけるとともに、子規肖像の文化切手発行を郵政大臣に請願し、あるいは子規遺跡の保存と標示碑石の建立を松山市に申請するなど準備に多忙を極めた。極堂は発会以来、従来子規は俳人としてのみ知名であるが歌人としても一流であることを力説していたが、全国最初の子規の紅梅の歌碑を中の川の旧居跡に建てたのは二十六年五月であった。戦後子規の句碑

稚桃は三十七年八月永眠された。生前は両者ほとんど毎回の如く講話された。極堂は主として事実見聞にもとづく追想、稚桃は資料文献による研究であった。

生前の子規を知る先輩は悉く物故して今は再び聞く由もないが、妹リツの幼な友達船田操、子規門下の諸星をめぐめる阿部里雪・八木彩霞・水木伸・小泉芝三・亀田小姑らをはじめ熱心な会員や部外の子規研究者、さらに和田茂樹・蒲池文雄ら愛媛大学子規研究グループの各教授ら、子規中心の限られたテーマであるにもかかわらず常に多彩な講師にめぐまれ、安倍能成、服部嘉香らも帰郷の際快く講演され、陸羯南の遺族が出席したり、新資料の発表など、四十一年の子規・漱石・極堂生誕百年祭、四十八年の虚子・碧梧桐百年祭など盛大な行事をはさんで、毎月の例会は欠かすことなく続いている。

ただこれら貴重な講演が、発会後数年間は記録が残されていないけれど、二十五年六月会員自署の出席者名簿を設けたころから、いっとなく廃止されて残るところがないのは遺憾である。会則には『居士に因みある冊子』あるいは『例会の講演筆記その他を載せた会報』の刊行を規定しているが、謄写印刷の講演特集一回と「紅梅の歌碑」「内藤鳴雪」の小冊子二回を発刊しただけで、現在のハガキによる案内を兼ねた「子規会報」は二十三年八月以降今日まで続いているが、一時謄写版一枚刷にしたこともあるけれど、印刷費郵税等の関係で永く続かず、記録刊行は会員の久しい待望であった。五十

二年一月以来越智通敏の好意により録音、原稿、編集からタイプ、印刷に至るまで独力による「子規会報」が発刊されるに至り、会員は多大の満足と感謝の意を表していたのであるが、今回この「子規会誌」に発展することになったのはまことに喜ばしい。

創立以来三十七年、地味な存在であるが先輩の遺志を結集して質実な歩みをつづけている。子規を景慕欽仰するもの跡を絶たず、会員は年々増加を見ている。五十一年愛媛新聞社主催の子規・漱石展が記録的な成功を収め、愛大グループを中心に編集の講談社版子規全集二十五巻が完結、さらに松山市立子規博物館が実現しつつあるなど、本会多年の業績が直接間接これらの機運醸成に影響していると言えないだろうか。あらためて思い起こすかつての会員の切々たる叫びのように、「子規が永遠に不滅である限り子規会もまた永久に存続せねばならぬ……」。

### 「子規会誌」について

旧「子規会報」は、例会における講演を記録した月報であったが、内容を充実して範囲を広げ、単なる月報ではないことを示すために本誌を「子規会誌」とし、表紙の題字を寒山落木からとった。一応このようなスタイルで出発したが、なおよい構想があれば具体的にお示し願いたい。

## 「子規全集」編集を終えて

正岡子規の研究と、子規業績の普及に多年にわたり努めて来られた松山「子規会」で、新たに「子規会誌」を創刊されるにあたり、昨秋「子規全集」二十五巻を終えた私どもに「編集余話」を書かないかと誘ってくださった。

編集者には、自分の仕事については語らざるをよしとする一種の気どりがあつた。また、講談社には社外執筆を許す制とする内規もある。しかし私は、やや考えて後に、書かせていただくことにし、上司へ申請の書類を認めた。

そのわけを言えば二つある。

一つには、越智二良会長を初めとする子規会の方々に、「子規全集」の企画段階から完結まで、たいへんお世話になった御礼を述べたかったのである。愛媛大学子規研究会員で直接企画に加わっていただいた先生方のほかにも、資料を提供して下さった方、取材のあっせんをして下さった方、はたまた愛媛特産蜜柑伊予柑をお送り下さって激励を賜わった方、物心両面で編集部にいただいた御援助は、はかりしれないものがある。

そのお一人お一人を、私はほとんど存じあげない。私は中

本誌は季刊誌として、四月、七月、十月、一月と年四回発行し、印刷上の経済的理由そのほかから当分三十二ページ建てとし、表紙裏をも最大限に利用するため、表紙裏には「例会記録」をのせる。

本誌の内容は、量的には三回の例会の講演内容が中心になるが、それだけでは従来の月報の域を出ないので、毎月特に特別寄稿を求めて本誌に重みを持たせることにした。昨年末に完結した「子規全集」を記念して、本創刊号では、講談社にあつてこの全集を担当せられ、みごとに成しとげられた駒井編集長の玉稿をいただくことができたことは喜びにたえない。

ことにまた、会長さんには、創刊のごあいさつとして回顧をしていただき、松山子規会の重みを感じさせていただいた。

その他、本号では載せることができなかったが、創立当初以来の子規会の記録を載せる予定であり、そのほか、子規関係の新資料、研究の記録などを中心に、子規周辺の人びとのそれについても集録していくこととする。また、会員一般からの研究や随筆も取り上げさせていただきたいので、いつなりと進んでご投稿願いたい。

なお、お断りしておきたいのは、今回載せるはずの二月例会講演「霽月と勝田明庵」が、スペースの都合で次号回しになったことである。

(編集子)

講談社・文芸局 駒井皓二

途で編集部に加わり、松井編集部長の遠逝によって責任者を引継いだ二代目だからだ。昨秋、全集完結後によりやく、越智会長と正宗寺子規堂の田中義晃師に御挨拶に上がったばかりである。

この機会に誌面をおかりして、改めてあつく御礼申しあげたい。

蕪文執筆理由のもう一つは、「子規全集」は、編集責任者としては、大部分が故松井勲の仕事であり、自分の仕事を語ることはないからだ。

松井さんは(社の身内にさんづけはおかしいが、この際、私も日常の呼称をお許しいただきたい)、第十一回配本の『評論日記』を校了した昭和五十年の大晦日にたおれ、第十四回配本の『漢詩新体詩』校了後の五十一年七月二日に亡くなった。葬儀の日に『漢詩新体詩』の刷り出し一揃いが、ようやく間に合い、柩に納められた。

巻数でいえば残りの十一巻を見ることなく去つたのだが、「子規全集」の大業全体からいえば九分通りの仕事が終わっていた。(誤解のないよう申し添えるが、これは編集作業の



面から見てのことであり、和田茂樹先生を初めとする研究執筆者の仕事面からいうのではないことはもちろんである。

残り十一巻に二年余を費したわけだが、引継いだ私の立場は、野球でいえば、大量リードした試合の九回裏に、打球を受けたエースに代わって登板した新人投手のようなものであった。それも、バックの美技に支えられて、ようやく責めを果たしたかっこうである。

松井さん追悼記事を載せた社内報に私はこういう意味のことを書いた。「業半ばにしてと悼む声強いが、松井さんは巨峰『子規全集』の頂上を極めていた。私どもは松井さんが運び残した荷を、松井さんの切開いたルートを辿って運びあげればよいのだ」と。

これぞと思う仕事に、とことん取り組んで、自分に残された時間と競争しながら後世に残る文化事業をなした松井さんを送るこの小文に付した題は、「いわくいいがたい羨ましさであった。編集者を職に選んだものとして、この気持ちは今も変わらない。自分たちが手がけた『子規全集』について語ることに面映ゆさを感じない理由がこれである。

○

昭和五十年の六月、前々年の石油ショックによる印刷出版界の混乱は、ようやくおさまりはしたものの、紙代印刷代の高騰が書籍の価格に反映し、不況深刻化も手伝って出版物の

ったのである。この判断の誤りで、私は半年後に大慌てをすることになる。

「子規全集」編集部とは、たいへんな仕事をしているところであった。いいかえれば「子規全集」が企図した内容というものは、一出版社の企画としては常識はずれのもの、私には映った。

私を驚かせたこと（時としてあきれさせたこと）のいくつかを記してみよう。

まず、子規自筆取材に対する徹底ぶりである。それは、子規生前に発表されたものでも、自筆稿が現存する場合は自筆を優先し、異同を別に示すという大方針があるからであるが、短冊一枚、手紙の一部でも封筒だけでも、あるいは、子規評点の句稿一枚でも、情報あらば直ちに、日本全国遠近を問わずに取材に赴くのである。その写真を編集部では取材先別に整理したが、取材先は恐らく五百を超え、フィルムはざっと五万枚に達する。

このための労力費用は莫大である。時には遠路を向いても偽筆であったり情報が誤りであったりもする。しかし松井さんは、この種のむだはむだと考えていなかった。

関連して、ひとつ印象深かったことを述べたくなった。

それは、私が編集部へ移ったばかりの七月だった。松井さんは和田先生と一緒に書簡の原稿を作成するため、一週間ほど松山に出張した。その帰りに大阪に立ち寄って新加入の私を

売れ行低下が懸念されている頃であったが、私は、会社の幹部に呼び出された。人事異動の季節だから、その要請だなどという予感があった。（私はそれまで「小説現代」誌の編集に従事していた）しかし、提示された異動先が「子規全集」編集部というのは、全く思いもよらないことであった。

「子規全集」はその四月から刊行が始まり、『随筆一』『初期随筆』の二冊が出ていた。刊行が始まったのだから取材活動は一通り終わっているはずである。編集部増員なら、資料撮影などで一番多忙の時にこそすべきなのにと思ったからである。それに私は、国文学を専攻したが明治文学、なかなしく俳句の世界は門外漢である。即答しかねていると、さらに意外な説明を受けた。

「実は松井君の健康が心配なのだ。肝臓を傷めているのに、あんなに無理をしている。少しでも松井君の負担を軽くしてやってもらいたい」

松井さんが肝炎で入院したことがあるのは知っていたが、毎月の部課長会議の席で、今度の全集の内容がいかにか画期的なものであるかを説明するときの熱弁と眼の輝きに接しているし、また資料を求めての東奔西走を聴いてもいたから、そんな病人にはとうてい思えなかった。

そこで私は、これは「小説現代」をそろそろ代われということだなと考え、二年足らずの間、ゆっくり子規を読むのもよいではないかぐらいの気持ちで、「子規全集」編集部に移

正岡、司馬の両監修委員に紹介することになり、私も下阪した。松井さんは正岡家に先行しており、私はあとから訪問したのだが、この日たまたま、ぬやま・ひろし監修委員も来ておられて、同時に御挨拶を申しあげた。（余談であるが、この日お昼を御馳走になった折りの、ぬやま・正岡・松井三氏の兄弟のような打ちとけぶり、訪客二人が帰省した書生のように無遠慮にあれこれ注文を出しながらの食べっぷりに驚いたものだ。その三人が一年の後に相次いで亡くなることになるうとは……私には今また三人が天上に揃ってあの日の如く語り合っているように思えてならない。

印象深かったことというのは、食事をすませて、司馬遼太郎邸に向かった時のことである。松井さんは松山帰りの大荷物をつつ抱えていた。どちらも本や書簡だからズシリと重く、私は当然タクシーを利用するのだと思った。しかし、そうではなかった。見かねた正岡家の御息が車で最寄り駅まで送ってくれた。

司馬家を辞して新大阪駅までは車だろうと思ったが、この時も駅へ向かって歩きだした。かたくなに重い方の荷物を譲らなかつた。炎暑の日であった。十二、三分歩き、駅前のパーラーで氷水を頼んだ。

「これが一番だよ」

と白い歯を見せた。資料取材に万金を投ずるが、長途の旅の疲れた体をいとうことをしない。少しでも費用の節約を考え

ている松井さんの姿は、胸に迫るものがあつた。その日、別に所用あつて大阪泊りだつた私は、せめて新大阪まで送るというのも拒まれた。大阪駅で宿泊先をたずねられて、ロイヤル・ホテルというのがちょっと告げにくかつた。

編纂部の部屋に折りたたみ式の簡易ベッドがあつた。松井さんが医者から指示されている小休止用とのことであつた。しかし松井さんが使っているのを私は見たことがない。私が移つた最初の日、これをリクライニングの形にして横になつていたのは柳生四郎氏であつた。といつても休んでいたわけではない。書簡だつたか句稿なのかわからないが、何か自筆稿を、目から離したり近づけたり、光にかざしたり斜めにしてみたり、果てはペンシル型ライトで裏から表から照らしたりしている。それは本全集の驚くべき方針の一つである抹消文字の復元に耽つている姿であつた。

これは柳生氏の該博な知識と豊かな経験、そして、たぐひ稀な忍耐力あつて初めてなし得ることであつた。一字を読み解くに数日を要することしばしばと聞いて、さもありませんと思ひ、かつこの完璧主義に無理が来ないかと正直のところ案じました。

柳生四郎氏は本全集で扱つた自筆稿の翻字のほとんどを一手に担当された。その量の尨大なること驚嘆すべきものがあつり、多くのクセ文字や破れ、虫喰い、にじみ、汚れ等で困難

わしきは大抵のことではない。あれほどに組み上げてもらへたのは精興社ならではのことである。

この巻のほかにも、『研究編集』や『初期文集』など特殊技術の必要な組みかたたくさん使つてある。見過ごされがちだが、本全集のけたはずれなところである。

また、私がびっくりしたことの一つは、漢詩の巻で、漢字の異体字を数多く新たに作字していることである。子規の用いた字体を可能な限り原文に再現しようという意図である。印刷所の字体にない字体を作るには一本数十円の費用がかかる。手間も大変なものである。ここまで徹底した本作りは、一般的な刊行書では、今後、ちょっと考えられないのではなからうか。(原文通りを原則にスタートした中央公論社の『洒落本大成』は、活字化のむずかしいケースは原本を写真版にして載せている)学術資料としての厳密性を要求された渡部勝己先生の姿勢に呼応した印刷所の努力も記しておきたいところである。

そう言えばこんなこともあつた。最終回配本の『年譜資料』の出張校正を翌日に控えた夜であつた。出張校正とは、印刷所の現場に向いて出校したゲラ刷りを直ちに校正すること、普通、ノ切の厳しい雑誌の編集部が止むを得ず行なうことなのだが、「子規全集」の後半は発売日がずれ込まぬよう毎回これを行なつていた。特に最終配本は予定日を過ぎていたから急いでいたのである。

を極めること筆に尽くしがたい事例もまた多かつた。なかんずく特筆すべきは『俳句会稿』に収めた全句会記録の翻字である。『俳句会稿』は八ポイント活字二段組みで八六四ページと最も大冊になつた。句会記録は完全なものであれば、会者の作句の清書稿と、全員の選句稿が残っている。これをそのまま掲載すれば、少なくとも七、八巻を要するであろう。それで、会者全員の作句を並べて句頭に選出者名を付する型に編集し直したのである。だから柳生氏が自筆から翻字した原稿は、収録したもの七、八倍はあるのだ。

正岡家、国会図書館、麻野家、慶応大学図書館、岡田家等に散っている句会記録の写真、コピー類は大きなダンボールに四つもある。もともと、後の世に残すべく整理されたものではなく、字は乱雑なものが少なくないし、綴りも順序が乱れていたりする。また、回覧句会稿の朱筆による評語書き込みは、写真では極めて薄色となるなど、柳生氏の労苦は大変なものだつたが、氏の集中力は凄まじいものがあつた。この巻は翻字の後の作業が大変だから、時間的にも相当無理なお願ひだつたのだが間に合わせていただけた。その奮闘はまさに明治の人の気骨を見る思いであつた。

俳句会稿といへば、句頭に選者名の一字を採つて付す方式は、印刷所に多大の苦勞をかけた。その一字の脇にさらに小活字で天、地、人などと付したのだから、植字の人のわずら

私にとって永い永い年月であつた全集の最終校了がいよいよ明日というので、やや興奮気味にその準備をしていると、精興社で最初から「子規全集」を担当してくれている神山氏から電話が入つた。

「先刻社長が急死しました。昼までは何事もなく元気だったのに……。突然の事で社内がとりこんでおりますので、もしかすると明日の出張校正ができなくなるかもしれません」とのことであつた。

十月中の刊行に間に合うギリギリの日なので何とも困つたとは思つたが、「無理せぬように」と答えて電話を切つてしばらくすると、またベルが鳴つて、

「役員会で、おとくい様の予定はあくまで守るようにと決定しました」

とのことであつた。翌日、青梅の精興社に向くと、いつも通りいかに篤実な技術人らしい大野工場長が迎えてくれた。お悔みとお礼を併せて述べると工場長は、

「社長と僕は幼な友達、同級生なんですよ」と言われた。「子規全集」を荷つた人がまた一人、完結目前に亡くなつたのである。精興社は、岩波書店や筑摩書房とも関わり深く、幾多の良心的出版物を手がけて来た。「子規全集」が評価を受けるときに、根底を支えた精興社の名を逸することはできない。

刊行二年目に入った五十一年の正月、仕事始めの五日に、

休暇中に進めるべく自宅に持ち帰った『書簡』資料の大荷物をかっついて出社して来た松井さんは、

「いやあ、ひどい目にあつたよ」

と暮れからの大発作の話をした。

「もう治ったけれど、仕事が全然できなくて」

と言う松井さんに、私は、今度こそ、毎月刊行の減速を強く提言しようと思った。以前に何度か、その事を口にした時の返事は、

「毎月刊行は営業の要請（間があくほど売部数が減る）でもあるし、とにかく行けるところまで行こうよ。」

というものだった。それを私は、文化的意義は絶大でも採算のとりにくい企画を推進していることへの配慮だと考えていた。後にして思えば、松井さんの気持ちの中には、自分に残された時間との競争という意識もあったのではないかという気がしてならない。

軽く言い出せば受け流されるから、正面切って切り出す機会を作ろうと考えたのだが、すぐに病状は再び悪化、松井さんは出社できなくなった。しかも、自宅療養ながら絶対安静を強く要請された。当面の指示を受けるために特に許された私が訪ねると、温度をかなりあげた部屋のベッドに横たわる松井さんは、両手に白い手袋をはめていた。不審に思ってたずねると「エネルギーの消耗を防ぐため」と言う。私は初めて事の重大さに気づいた。そして動揺した。

結実した。この年表作成時に、近藤さんの疑り性は、これが最後とばかり最大限に発揮され、全著作の製作あるいは発表の日付けを全部原典に当たり直し、前記の如く校了直前まで紙誌調査に足を運び、多くの事実を明らかにした。

また、この種調査では、子規資料の掲載されていることを発見すること、掲載されていないことを確認することは同程度に重要なことはいうまでもない。発表、未発表を問わず子規資料をこれだけ広範囲に位置確認した人はいないのではないか。

近藤さんは、私が頼りすぎたためか一時健康を害され、松井さんが亡くなった七月から郷里小松で静養した。その時も私はうるたえたが、二か月後に復帰された。私はほんとうにホッとした。「子規全集」が完結して近藤さんは小松に帰った。約六年の間子規に没頭してつちかった蓄積を今後もしかして行きたいと考えておられる。和田茂樹先生の御配慮あつて、今度建設される松山市の「子規記念博物館」の設立準備の仕事につかれる話が進んでいると聞いている。近藤さんにとっても、とてもよい職場だと思われ、博物館にとっても、これほどの人材は他に得にくいだろう。当面、市の囑託とのことであるが、仲間意識で言えば「子規全集」編纂の大功労者がふさわしい場を得るために、もっと大きく言えば、子規研究の発展のために、一日も早く、正規の職員として御採用いただきたいと切に願っている。筆がいささか逸れるが、新

編纂部に移った当初の居候のような気分はもうないにせよ、半歳の修業では、子規への知識はあまりにも足りない。

この時、頼りない留守居役を支えてくれたのが近藤有子氏であった。近藤さんは愛媛県小松市の出身、愛媛大学文学部国文科卒業生で、企画発足の頃から和田茂樹先生の研究室にあって資料調査から、各巻編成の準備に携わり、その後上京して松井さんと常に作業を共にして来た人なので、全巻のことを何でも知っていた。近藤さんに聞かなければ私は何もできなかった。「子規全集」が企てた大業の一つに、子規の俳句、短歌、文章の掲載紙誌調査がある。これにとり組んだ近藤さんの仕事ぶりも、私をあきれさせた。

国会図書館はもとより、東大の明治新聞雑誌文庫、近代文学館等にひまさえあれば足を運び、少しでも可能性のある新聞、俳誌、一般文芸誌を精査した。あまりに足しげく通うので、近代文学館や明治文庫では、職員とすっかり仲良しになり、ちょっとした調査は近藤さんが電話すると先方で調べてくれるほどになった。このことは大変ありがたかった。

東京だけでなく、遠く熊本日日新聞社のマイクロフィルムも調べたし、最終巻校了の直前までねばって、静岡市立図書館蔵の静岡新聞に目を通して。この大仕事で、俳句三巻、短歌の巻の脚注の充実に大きく寄与し、多くの新発見につながった。最終的には日本の文学者の中でこれだけ精細な作品目録を持つ人はいないと思われるような大部な「著作年表」に

博物館に御関心をお持ちの各位にも御理解御支援をいただきたく一筆の次第である。

この全集に携ってみて私が驚いたことは、他にもいろいろある。学術的に完璧な本文を示すことのほかに、一般読者、あるいは初心の研究者のために、実にゆき届いたことをしているのだ。

各巻に参考資料を付したのもその一つ。たとえば子規と与謝野鉄幹との対立事件は、その経緯のすべてが参考資料でわかってしまう。また書簡の編注に、子規あて書簡との対応が説明されている。俳句が記されていれば、その句が子規の俳句稿のどこに位置するかが注されている。漢詩には読み下し文が特につけられた。私が、和田先生や松井さんに、「冗談半分ながら「この全集は読者過保護ですよ」と言っただけくらいである。

○

いろいろ述べてまとまりのないものになったが、そろそろ紙数がつきようとしている。文中、私は、これだけの大仕事に直接当たってくださった、愛媛大学子規研究会の和田茂樹、蒲池文雄、渡部勝己、長谷川孝士の四先生の大変な御苦勞、傑出した御業跡には、あえてふれなかった。それは、本誌をご覧になる方々、全集を見て下さった方々、また一般の方で

も「愛媛新聞」の二ページ特集など御覧の方々には充分御承知のことと思つたからである。

結果的には自社刊行物の自讃、編集部への努力の吹聴となつたことはいかにも気恥ずかしいが、実情を一つ明かせば、全集第一巻解題の末尾にある、編集部スタッフ十七名のうち講談社社員は四名しかいない。最後まで編集部にあつたのは二名である。そして社外から編集部に加わつて下さつた方々の地味な努力は敬服すべきものであり、その功績ははなはだ大きいと言わねばならない。この人々の助力を得て、全集をまとめた責任者として、最年長者柳生四郎氏、愛媛出身者近藤有子氏の事例をもつて、その功績を記して置きたいと考へた心情を御諒察いただきたい。松井勲編集部長につきふれる所多かつたのは、筆者いささか情に激した傾きもあるが、松山の生んだ偉大な文人に、これほどまでに傾倒し、生命かけて打ち込んだ編集者は戦後初めてであることをもつて御寛恕をたまわりたい。

なお私自身は、めぐり合わせを得て「子規全集」に携り得たことをほんとうによかつたと思つている。理由の一は、初めて一人の文学者の、それも文学史上有数の優れた文学者の全業績を通観する機会を得て、大いに得るところあつたことであり、理由の二は、松井編集部長の生き方を身近に見て、編集者かくありたしの貴重な示唆を獲たところにある。

(昭和五四・二・一八) (特別寄稿)

## 松山子規会叢書

松山子規会発行

B六版 本装丁美本

### 第一集「たれゆえ草」

越智二良著

二八〇ページ 一、〇〇〇円

珠玉の随筆があふれる。

### 第二集「ふるさと歳時記」

山本富次郎著

二八一ページ 一、〇〇〇円

たのしくなつかしいふるさと。

### 第三集「狸のれん」

富田狸通著

四〇四ページ 二、〇〇〇円

狸の俳画は天下一品。

## 子規と須磨・奈良と柿

村上春次

はじめに

昨年十一月七日から十四日までの七日間、子規居士の跡を慕つて松山―須磨―奈良の旅をしたので、そのあらましを別表の日程に従つて書いてみたが、読者のみなさんも、今を去る八十四年前の居士と一緒に旅をしたつもりで読んでいただきたい。

さて、明治二十八年は、居士にとっては元気で旅のできる最後の年であつたと同時に、また居士の生涯のうち最高にして最良の年ではなかつたらうか。つまり、意気軒昂、気力の充実した、また、旺盛なる句作の年であつた。

この年、居士は日清戦争に従軍したが、無理がたたつて結核が悪化し、帰国後神戸病院・須磨保養院で療養の後、郷里松山へ帰つて五十日間漱石とともにくらし、散策集の句作をし、漱石から十円の恩借をして松山を発ち、須磨・大阪を経てあこがれの古都奈良に遊び、十月末帰京したのである。

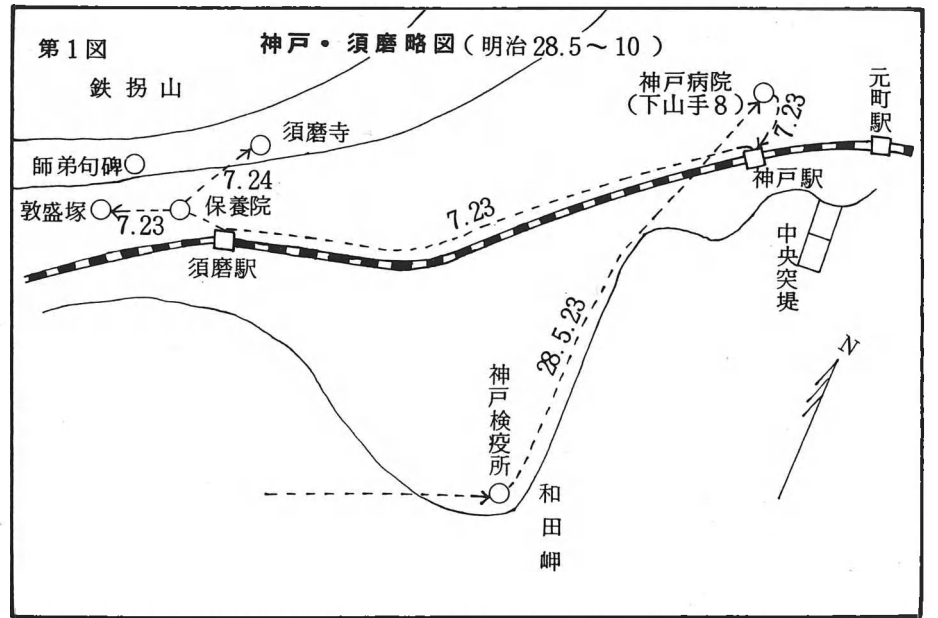
しかし、この旅の日時・場所等が旅日記的に記録されてい

ないのでなんとか構造化できないものかと、まず子規全集(講談社、以下同じ)第二巻寒山落木巻四に集録された約三千句の中から百余の句を、また同第六巻竹之里歌から関係のある歌を若干選び、同第二十二巻の年譜、同十八巻の書簡集等を参照して、日時と場所と句を構造化して仮設的日程を作成し、それを实地に検証(とくに奈良を)して、さらに修正しようとしたのが今回の私の旅の目的であつた。

なお、ここでとくに強調したいことは、この旅における居士のロマンチズムである。左千夫も言っているように、居士は理性的である反面に情的なところも多かつたが、とくにこの旅において、万葉調のおおらかで素朴なロマンチズムが、須磨・音戸の瀬戸に、そして古都奈良の「柿と美女と鐘」のなかにそのハイライトが見いだされるのである。

子規と須磨





日清戦争従軍(二八・四・一〇)(五・二三)

居士にとって明治二十八年の重大事件はなんといっても日清戦争の従軍である。その決定がよほど嬉しかったとみえて、五百木飄亭あて書簡に「生来稀なる快事に有之候」とのべている。

さて、同四月十日近衛師団に属し字品港出発、同十三日大連着、金洲・旅順の戦跡を見て、同五月十四日佐渡丸にて大連発、途中玄海灘で甲板から轢かれているとき咯血、同二十三日午後三時和田岬検疫所にて従軍解除される。同五時ごろ釣り台で祭礼の大鼓の音を聞きながら約四軒の行程を経て神戸病院の二階二等室に入院したのである。

神戸病院(明二八・五・二三~七・二三)

神戸病院は明治二年同市山手八丁目に創立され、同三十三年現在の神戸大学附属病院のある楠町に移転しているが、明治初期には全国的にも一等級の病院であった。

同二十七日虚子来たる。二十八日危篤、家族へ電信する。同五月末の卯の花の候になっても、血が止まらぬので、居士の発想で氷囊で肺を冷やしつづけたために凍傷を起こした。その時の句

卯の花の里を氷のやけどかな

船中で咯血した血を呑みこんだため胃腸障害を起こして米

須磨浦(同七・二三)

そこには夢のような静かな波が寄せていた。塩焼く海士の煙が立ちのぼり、眠るような一帆がいつまでも淡路島の島陰にあった。白砂青松、風光明媚なる須磨浦を

須磨の浦は砂うつくしく松青し

南をうけし潮あみどころ

と詠んだ。天岸太郎氏の「子規の須磨にありし時」によると、二人はさらに履物をぬいで素足で海水の中へ入ったようである。そのときの句

涼しさを足に碎けて須磨の波

須磨寺(同・二四)

夏の太陽の下に病後の身であえぎながらやっと山門にたどりついた。

山門や青田の中の松並木

山門は昔のままであるが、今は青田も松並木もなく、門前町の一本道となっていた。

須磨寺には敦盛の笛等源平ゆかりの旧跡もあり、また、門前町には平重衡捕われの地もあるが、そのかみの平家の公達を偲んで、

無子に蝶々白し誰の魂

それからさらに一の谷、二の谷をこえて敦盛塚に詣でたの

養がとれなかったが、江馬副院長等の手当てで居士の生命力の強さから次第に快方に向かい、同六月三十日付け鳴雪あて書簡に「追々元気づき申候」と書いて次の句を送った。

夏やせて大めし喰ふ男かな

「仰臥漫録」にもあるが居士の健啖ぶりが彼の生命を蘇生回復させたのであろう。

神戸病院退院(同七・二三)

このように、同六月末には食欲も出て、七月二十三日には退院の許可を得るまでに回復したが、なお長期の療養が必要であるので、須磨にある保養院へ転地するようになった。

このときの居士は再生の喜びに充ち満ち、よほどうれしかったとみえて七月の暑さも吹きとばさんばかりであった。そのときの句

うれしさに涼しさに須磨の恋しさに

さて、虚子の「子規居士と余」によると、居士は虚子とともに神戸病院を出て神戸駅へ向かう途中で、洋品店に立寄って一個のヘルメット型の帽子を買った。

病後のやつれた顔を蓄え、単衣の下にネルのシャツを着、それにヘルメット型の帽子を被った居士の風采は、まことに紳士然として、今までとは異なった印象であったようである。それから松原を通って波打ちぎわに出た。

である。

#### 敦盛塚(同・七・二四)

若冠十七歳で熊谷次郎直実に打たれた敦盛を哀んだのであらう。

石塔に漏るる日影や夏木立

敦盛は若くして死んだ。しかし、自分は為すべきことが山ほどある。今死ぬわけにはいかない。一日も早く病を治して立ちあがらねばならない。その思いが次の歌となった。

夏の日の敦盛塚に涼み居て

病気なほさねばいなじと思ふ

それから、二人で敦盛そば(現在も看板があった)を食った。虚子は「子規居士と余」の中で「居士の健啖は最早や余の及ぶところではなかった」と書いているが、恐らくはそばを何杯もお代わりしたことであらう。

#### 虚子東帰(同七・二五)

いよいよ虚子が東京へ帰ることになって、その出発の前夜、居士は虚子と夕飯をともにしながら病気の介抱を感謝するとともに、後継者になってくれるよう依頼した。しかし、虚子は即答をさげ、同二十五日そのまま東京へ帰った。

なにも礼をするものがないが感謝の気持ちだけくみとってくれと、

贈るべき扇も持たずうき別れ

の句をしたためている。そして、鳴雪等東京の友人には、ことづてよ須磨の浦わに昼寝すと

の句をおくった。その後子規五十年忌に、

月を思ひ人を思ひて須磨にあり

と虚子が詠んだ。

この子規・虚子師弟句碑は、その情誼に感激した酒井一雄氏が私費を投じ、昭和二十八年、須磨浦公園の一角に建立したものである。師弟碑というのは全国でも珍しい。(読者各位も神戸港の待ち時間を利用して訪ねてほしい。)

#### 須磨保養院(同・七三〇八・二〇)

須磨保養院は一種の湯治場で、二の谷と三の谷との間、現在のみどりの塔のあるあたりに建てていた。その一部に肺を患った者の保養所があった。そこへ居士は一月入院保養したのである。この間、朝には苺を摘み夕には陣中日記を書き、居士にとってはまことに再生の喜びにみちた快適な日々であったようである。

白砂青松、後ろには鉄拐山、前方遙かに紀州の連山を眺め、海岸に近く、すぐそこを白帆がすぎっていく。

暁や白帆過ぎ行く蚊帳の外

この句碑は現在須磨寺の桜寿院の境内にあった。さて、居士はここで源氏物語の巻を読みながらさぞかし平

#### 帰郷

いよいよ保養院を八月二十日出発、郷里松山へ向かう。途中岡山に一泊。

#### 広嶋(同八・二一〇二三)

同二十一日広嶋着、旧知の飄亭の下宿に二十四日まで泊る。なお、飄亭は居士より先に日清戦争に従軍し、広嶋に帰って陸軍病院に勤務していた。お互いの無事を喜びあって、従軍の苦勞話に花を咲かせたことであらう。

秋風や生きてあひ見る汝と我

と詠んでいる。

そして同二十四日飄亭に送られて字品より海路松山へ向かう。この日海荒れて波高し。

#### 音頭(同八・二四)

舟ゆれる音頭が瀬戸や秋の風

なお、その昔音頭の瀬戸を切り開いた平清盛を偲び、珍しく長歌をつくった。

平家の栄華極めたる 六十年の夢さめて

子孫も継がずなりぬれど 世に残したる功業は

恩沢今に及ぶなり

ここにも居士のロマンチズムが見られる。

安の昔に想いをはせていたことであらう。「養痾雜記」によると「須磨の風足もとに吹き入れて、灯火青く夜更けにし頃、寝ころんで静かに源氏物語明石須磨の巻をひろげて見れば、我もその人の心地して独りほほえまることも多かり……藤(紫)式部とは我が若き時よりの恋人なり」と書いている。夢中になって読んでいるうちに月が雲間を出て居士の部屋に光がさし込んだこともあったのであらう。

読みさして月が出るなり須磨の巻

保養院の医師から脚氣の気があるから松山へ帰郷して保養してはどうかと言われたので急に望郷の念が起り、西方松山の空を眺めながらふるさとを恋しがったのである。

秋風の吹くにつけても月の入る

山の端いかにこひしかるらん

ここにも居士のロマンチズムが見いだされる。しかし、この反面暗い面もあった。

居士の保養院滞在は八月二十日まで続くが、しかし、病は完全に回復するには至らなかった。かろうじて命はとりとめたが完治ではない。いつか近いうちに、また病臥することがあらうとの予感があったのではなからうか。そして不幸にもそれが適中したのであるが。

夏瘦の骨にとどまる命かな

ともあれ、居士の明治二十八年のその後の旅の日程を追ってみよう。

愚陀仏庵(同八・二七)一〇・一七)

同八月二十四日三津着、船がゆれてつかれたためか同夜三津泊、二十五日大原宅へ、さらに同二十七日から十月十七日まで漱石の愚陀仏庵で明治の二大文豪の同居がはじまる。なお、この間松山および近郊を散策し幾多の句を残したが、これは散策集にゆずりここでは省略する。

松山発(同一〇・一九)

せはしなや桔梗に來り菊に去る

八月に帰って来たと思うと、早や十月に去るといふあわただしい日程であったが、これは居士にとっては最後の帰郷であったので、いつまでも忘れ得ない有意義な日々であったのではなからうか。松山を去るにのぞんで一句、

行く秋のまた旅人と呼ばれけり

この句を詠むと芭蕉の句「わが名をば旅人と呼ばれん初しぐれ」が思い出される。俳人の心境の共通性を見いだしたような気がした。

広嶋(一〇・二〇)

広島に一泊し、

なり、当地(大阪)にては全く動けぬ程なりしを、今井に厄介になり(したがって二十四日奈良宿泊説は採用できない)、服薬の効により今日(一〇・二五)は心地よく相成候。明日(二六)の中には奈良へ行き……とあることから自ら明らかである。なお、奈良の宿であった角定旅館宿帳の日付けによる、古賀蔵人氏の主張する二十四日奈良宿泊説は、居士の日付けの筆法、署名と重なった日付けの位置等から、反対証拠はないが、日付けが居士の真筆かどうか疑わしいので採用できなかった。但し署名そのものは真筆である。)さて、居士は十月二十二日須磨を発したが、歩行困難となり、梅田駅近くの旅館に宿泊したとみえて、

菊活けて荷物散らばる宿屋かな

の句をつくっている。

ここで二十二日、二十三日と二泊したが、一向に回復しないので、二十四日は今井病院で厄介になって服薬し、大分よくなったので翌二十五日は梅田駅近くの土佐堀の仙田重邦氏を訪ね一泊し、臥しながら、

行く秋のふしぶしいたむ旅寝かな

の句を読んでいる。そして、翌二十六日はいよいよあこがれの古都奈良へ向けて関西本線(明二五年大阪難波―奈良間開通)で大阪を出発するのである。したがって、奈良滞在三日間の日付けは、十月二十六日、二十七日、二十八日と推定される。

来て見ればここにも吹くや秋の風の句をつくっている。

須磨再訪(同一〇・二二)

須磨の生活がよほど楽しかったとみえて再び須磨を訪ねている。そのときの須磨はもう秋だった。

人も居ずほこりも立たず秋の風

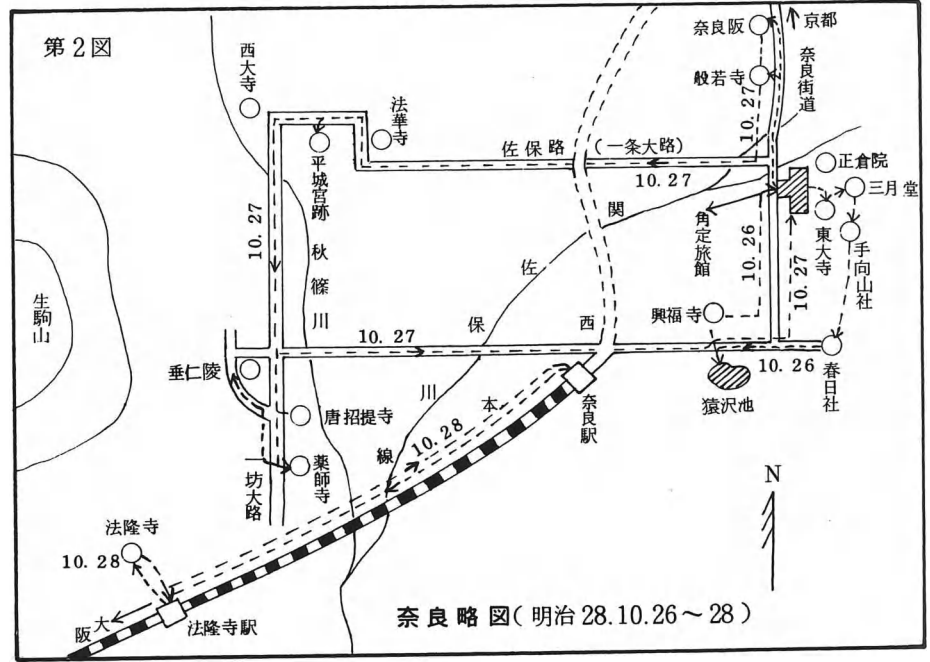
その夜は須磨保養院に一泊し、いよいよ待望の奈良へ向かって旅を続けるのである。そのときの句

須磨に更けて奈良に行く秋あら淋し

大阪(同一〇・二二)二五)

同十月二十二日須磨を発ち大阪へ向かう。なお、同十月二十二日から二十五日までの大阪での日程は現在もおお不詳であるが、私なりに推定すると次のとおりである。

十月二十二日と二十三日は梅田駅近くの旅館に宿泊し、二十四日は今井病院(筆者註以下同、陸羯南夫人の兄)に厄介になり服薬し、二十五日は土佐堀池田方の仙田重邦氏(「小日本」の編集に従事した)の下宿を訪ね、すき焼きを食べて旧交をあたためたと推量される。その理由を詳述すると、同十月二十五日付け碧梧桐あて書簡に「須磨にて(一〇・二二)リウマチスのため歩行困難に



明治二十八年十月二十六日(土) 曇

修学旅行の子どものように胸ときめかして奈良駅に着いたのはその日の正午ごろであった。(当時大阪―奈良間所要時間二時間ぐらい)あこがれの奈良駅に着いてその喜びを、

青丹によし奈良の都に着きにけり

今こそ見ゆれ奈良の都はと歌っている。

大阪に着いたころから腰骨が痛んで歩行困難であったのに、薬でこれを押さえ病をおして出掛けたが、二十六日二十三日の間、奈良滞留の間は幸いに病気も小康を得て、奈良見物を結構楽しむことができたのである。

須磨・松山の散策中のいでたちと同じく、ヘルメット型の帽子にネルのシャツ、着流しの腰に白ちりめんのへこ帯、明治の紳士然たる居士の得意な姿が、読者各位にも想像されるだろう。

さて、奈良駅から人力車に乗って、二・五軒の旧三条大路を、興福寺の五重塔を左に見ながら東進し、春日社の一の鳥居の処を左折して押上町から今小路にかかり、転害門の手前右側、京都街道沿いにある「角定旅館」に着いたのである。

角定旅館は主人の角谷定七の名を取って角定とか「かどや」といわれていたか、山岡鉄舟の命名により「対山楼」ともいわれていた。(現在は、取りこわされて原形を止めず。)

鹿もおらず樵天下り来る手向山

手向山から直ぐ隣りの若草山へ出て晩秋の山を見る。

末枯の若草山となりにけり

若草山の麓の近道を人力車で春日社へ参拝する。神社の関係者に尋ねると、明治初期は、石灯籠は常夜灯といって毎夕一斉点火していたそうである。(そのススが奈良の墨の原料となった。)しかし、現在は石灯籠だけで千八百個もあるので、年二回、二月の節分と八月のお盆にのみ一斉点火するのとであった。ともあれ、居士の時代は夕に一斉点火したようである。このとき時雨があったのであろう。

灯ともすや露のしたたる石灯籠

春日社の参道を飛火野へと車を走らせ、ふと後ろをふり返ると夕暮の春日の杜の中に常夜灯の火がちらちらと見えた。

ともし火や鹿なくあとの神の杜

それから春日野(今の奈良公園)に出たときはすでに午後五時をすぎたのであろう。そのとき淋しい雄鹿の鳴き声が聞こえてきた。

春日野の女鹿呼ぶ夕かな

続いて浅茅ヶ原あたりの春日野の道に車を走らせながら、居士の想いは遠く万葉の昔にかえり、さながら大宮人になり切つて、奈良の晩秋の夕のわびしさをしみじみと味わつたのではなからうか。

奈良淋し万葉の秋を見付けたり

宿は古賀蔵人氏の「柿くへば……の旅の宿」によると、格子表の奥深い母屋があり、その奥に二階建ての離れがT字型

に続き、二階は北から十畳に控えの六畳、八畳に控えの六畳南に十四畳の広間があったようである。離れの庭の東南に数本の御所柿の木があって鈴なりによく育っていた。居士は恐らくは北の十畳の間に落ちついて軽く昼食をして、午後三時ごろまで休憩して旅の疲れをいやしたことであらう。

午後四時前にまた人力車に乗って、転害門を入り、正倉院の裏通りへ出て大仏殿の裏を廻って鏡池へ出た。大仏殿の裏は松林と草地で秋風が松の間を吹きぬけていた。そこで、

大仏をまはれば淋し秋の暮

と詠んでいる。

それから鏡池から正門に廻り、大仏を拝観する。そのとき裏の松林から秋風が吹きこんできたのであろう。

大仏の尻より吹きぬ秋の風

さらに人力車と徒歩で二月堂から三月堂へ参拝する。三月堂は、天平十八年(七四六)ごろの建て物として現存し、内陣には日光、月光菩薩等九体の仏像が千年以上も原状を維持していた。

行く秋や一千年の仏たち

次いで手向山神社を左に廻って境内の裏の手向山へ出る。私の行ったときは折よく二頭の鹿がいたので写真をとつておいたが、明治の初期は鹿が少なかったとみえて、

さらに浅茅ヶ原を通りぬけ、一の鳥居のあたりに来て興福寺の五重塔を見上げたとき、秋の日はすでに興福寺の木の間に(つまり生駒山南方)に没し(十月二十六日の奈良の日没は午後五時〇八分)、五重塔をシルエットのように秋空高くくつきりと写し出していた。

秋の日の木の間に落ちて塔高し

実はこの句の場所の実証が一番困難であった。奈良で五重塔のあるのは興福寺と薬師寺のみであるが、居士の興福寺の春の句に「道端に桜咲くなり興福寺」「塔高し桜に落つる三日の月」があるが、これから類推すると興福寺のようである。しかし、真偽のほどは居士のみぞ知るところである。

次いで猿沢池を経て興福寺の境内に入る。しかし、今もそうであるが、当時も囲いがなかったとみえて、

秋風や囲ひもなしに興福寺

秋の日はとっぷりと暮れ、秋の虫が興福寺の西金堂(東金堂は現存する)跡や門の跡の草むらで鳴いていた。

虫鳴くや金堂の跡門の跡

興福寺の境内を出て登大路・押上町を経て今小路の角定に帰ってきた時は暮六つ(午後六時)すぎであった。その日の行程は約五軒であったので、旅の疲れもあって、一風呂あびて夕食をとり、早目に二階の十畳の間に就寝したことであろう。

宿は大仏殿の裏つづきになつていたので、そこから鹿の鳴

く声が聞こえてきた。

鹿聞いて淋しき奈良の宿屋かな

十月二十七日(日) 晴

二日目の二十七日は腰痛もやわらぎ、天候もよかったので、西の京約二十軒の行程を人力車で精力的に廻り奈良の晩秋を満喫したのである。まず般若寺を訪ねた。ここには江戸時代に建造された釣鐘があるが、現在見てもまことに細く小さい鐘であった。

### 般若寺の釣鐘細し秋の風

般若寺の役僧はこの子規の句のあることを知らなかったの  
でその由を伝えておいた。(同様のことが三月堂でもあった。)  
奈良阪のあたりにはまだ盆地特有の朝霧が立ちこめていた。

### 朝霧や奈良坂下る小菊売

奈良阪附近は花崗岩の産地とみえて、

### 奈良阪や石切る家や秋の風

それから奈良街道を転害門までバックして右折し、佐保路  
(旧一条大路)を西の京へと車を走らせた。奈良盆地は、南  
は水田地帯であるが、北の一条路あたりは、今もそうである  
が、当時も畑地であったのであろう。その畑地を秋の風が吹  
いていた。

### 右京左京中は畑なり秋の風

車は西の京に入り、法華寺を訪ねた。ここは光明皇后の建

立した尼寺であるが、いかにも寂しい寺であった。

尼寺や寂莫として秋の行く

法華寺を出て平城宮跡を横に見ながら西大寺を經、三条町  
から秋篠川沿いに旧一坊大路を唐招提寺へと西の京の秋を味  
わいながら南下する。

### 奈良の秋唐招提寺西大寺

それから薬師寺へと車を進める。薬師寺の仏足石は釈迦の  
足裏をきざんだ石で、現在国宝となっている。居士もその石  
を拜んで

### 千年の露と消えけり足の跡

薬師寺から引き返して唐招提寺の北側を左折し、野路を通  
って垂仁天皇の御陵へ向かう。このとき秋の日はつるべ落と  
しに暮れかけていた。

### 秋の日の一人に暮るる野路かな

御陵の周囲に池があつて、その池の上を秋風が吹いていた。  
陵をめぐるて吹きぬ秋の風

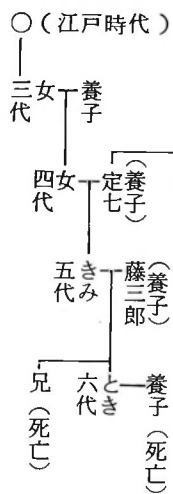
そこから旧三条大路を東へ向かい帰路につく。こころあた  
りは水田地帯であつて二毛作であるから、十月末でも一面に  
稲穂が穂を敷いたようであつた。

### 一条も九条も見えず稲穂

かくして約二十軒の行程を終え、今小路の角定に着いたの  
は、日もとっぷり暮れた夕の六時ごろであつた。

さて、ここから「柿と美女と鐘」の本番に入るのであるが、

### 角谷家系譜



それより前に角谷家系譜を解説しておくのと次のとおりである。

居士の宿泊した時の主人は定七さん(四代の養子)、その娘きみさん(五代)は当時妙齡十九歳、そのきみさんも養子藤三郎氏(南都銀行重役)を迎え、その娘がときさん(六代)である。居士のために柿をむいであげた美人の女中とよさんは定七さんの姪にあたる。したがって、きみさんの父方の従妹である。(母方の従妹説は訂正する)。とよさんは定七さんの実家のある奈良県添上郡月ヶ瀬村からお手伝いに来ている。月ヶ瀬は奈良市の東方三重県境に近く梅の名所として知られていた。居士がとよさんを梅の精霊であるまいかと思つたわけはここらにあるのではなからうか。また、きみさんととよさんは、当時の奈良でも指折りの美人であつた由である。私もときさんにも会いきみさんの写真も見せてもらったが、いずれも古都奈良にふさわしい京美人型の美女であつた。したがって従妹のとよさんも美女であることは想像に難くない。居士がほればれと見とれたのも無理がないと思われた。なお、

とよさんはその後大阪天王寺田町のお茶屋に嫁入りし、美人女将として有名であつたが、今次大戦で戦災に会いその後の消息は不明のことであつた。

ところで、随筆「くだもの」の「御所柿を食ひし事」(全集第十二巻随筆二、五三一頁)の中で居士は次のように書いている。

「或夜(筆者註、以下同様、一〇、二七)夕飯も過ぎて後宿の下女(とよさん)にまだ御所柿は食へまいかといふと、(宿の庭の東南の隅の御所柿の木に、柿が鈴なりになっているのを見付けていたのであろう)もうありますといふ。余は国を出てから十年程の間御所柿を食つた事がないので非常に恋しかったから、早速沢山持って来いと命じた。やがて下女は直徑一尺五寸もありさうな錦手の大井鉢に山の如く柿を盛って来た。流石柿好きの余も驚いた。それから下女は余の為に庖丁を取つて柿をむいであげる様子である。余は柿も食ひたいのであるが併し暫しの間は柿をむいでる女の、うつむいてゐる顔にほればれと見とれてゐた。

この女は年は十六、七位で、色は雪の如く白くて、目鼻立まで申し分のない様に出来てゐる。(きみさんとときさんと似て京美人型の美女であらう)生れは何処かと聞くと、月ヶ瀬(奈良県添上郡月ヶ瀬村、梅の名所)の者だといふので余は梅の精霊でもあるまいかと思ふた。やがて柿はむけた。余は其を食ふてゐると彼女は更に他の柿をむいでゐる。



柿も旨い、場所もいい。余はうっとりとして、(その昔、すぐ近くの佐保路に住んでいた万葉の歌人大伴家持が、恋人坂上大嬢に贈った歌「夜のほろろ我が出てくれば我妹子が思へりしくし幻影に見ゆ」を連想し、居士は目の前の美女をとおして昔の大嬢の美しい幻影を追いつつ、うっとりとしていたのではなからうかと私なりに空想してみた。)ポーンといふ釣鐘の音が一つ聞こえた。彼女は、オヤ初夜(午後八時)が鳴るといふて尚柿をむきつけている。「長き夜や初夜の鐘つく東大寺」はこのときの句であろう。

余には此初夜といふのが非常に珍らしく面白かったのである。あれはこの鐘かと聞くと、東大寺の大釣鐘が初夜を打つのであるといふ。東大寺が此頭の上にあるかと尋ねると、すぐ其処ですといふ(直線距離三〇〇米ぐらい)。

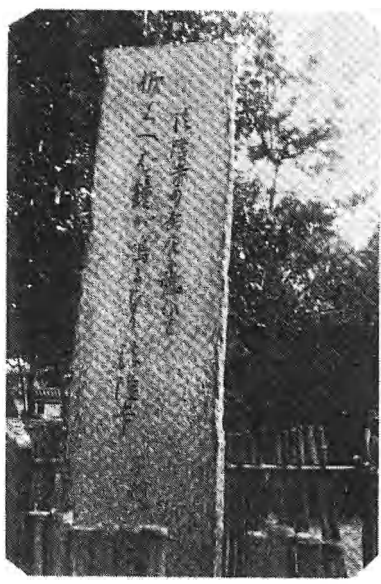
余が不思議さうにしてゐたので、女は室の外の板間に出て、其処の中障子を明けて見せた。成程東大寺は自分の頭の上に当ってある位である。(このときの句が「大仏の足もとに寝る夜寒かな」であろう。)

何日(二〇、二七)の月であったか其処らの荒れたる木立の上を淋しさに照らしてある。下女は更に向ふを指さして、大仏のお堂の後ろのあそこの処へ来て夜は鹿が鳴きますからよく聞こえますと、いふ事であった。」

鹿なく小窓の外は薄月夜  
居士の短い生涯の中で、この夜ほど楽しく、しかもちょっと

千年の煤もはらははず仏だち

そして、回廊を出たところにある池のほとりに「柿くへば……」の句碑がある。



法隆寺句碑

居士がこの池のほとりの茶店に休憩して柿を食べていた。そのとき東の夢殿の方の鐘楼から法隆寺の鐘がゴーンと晩秋の空に余韻嬌々と響いてきた。このときの居士の脳裏には、前夜角定で美女を前に柿を食べながら東大寺の鐘のポーンという音を聞いたときの幻想、ムードがそのまま残っていたのではなからうか。いや、初夜の鐘の余韻が、翌日の法隆寺で柿を食べているときまで続いていたのであろう。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

りり艶めいた思い出はまたとなかったのではなからうか。よほど美女のとよさんが気に入ったとみえて、五年後の明治三十三年、京都の愚庵和尚の送ってくれた柿を食べながら、柿に思ふ奈良の旅籠の下女の顔という句をつくっている。

十月二十八日(月) 時雨

いよいよ古都奈良に名残りを惜しむ日が来て、三日目は法隆寺を訪ねた。人力車で奈良駅へ、奈良駅から汽車で法隆寺駅まで(所要時間四〇分以内)乗車し、法隆寺駅から一軒余の野路を歩いて法隆寺へ向かう。このとき時雨が一面の稲に降りそそいでいたのであろう。(二毛作であるから十月末稲穂が出ていた。)

稲の雨斑鳩寺にまうでけり

南大門を入り、松並木の白砂の参道を通りぬけたとき、左前方の回廊の屋根と松越しに五重塔を眺め、さぞかし胸をときめかしたことであろう。やがて、中門を入れて回廊を廻り、五重塔・講堂・金堂の全景を眺めながら、居士の心は一二八八年前の法隆寺建立の飛鳥時代に遊び、聖徳太子の偉業を偲ぶとともに世界最古の建築の調和の美に驚嘆したことであろう。

講堂を経て金堂に入り諸々の御仏の像をほの暗い灯明と香煙の中に拝して、

という名句がすんなりと出てきたのではあるまいか。

それから時雨の中を駅まで歩き、奈良へ帰る汽車を待ったのである。

行く秋を雨に汽車待つ野茶屋かな

かくしてその日は角定に泊り、翌二十九日は大阪仙田方に宿泊、三十日大阪発、三十一日鳴雪・虚子・碧梧桐の出迎えをうけて東京新橋着、子規庵に無事帰着したのである。

そして漱石あてに「恩借した十円は奈良にて使い果し候」と書簡を送っている。まさに居士の面目躍如たりである。

おわりに

居士自身が「ことわり書」の中で「寒山落木、巻四の名所の句は必ずしも実際に遭遇して作ったものでない、一部又は全部想像によるものもある」といっている。したがって、この拙文にも時と場所と句が必ずしも一致しないものもある。とくに奈良と大阪での日付け、日程が不詳であったので、私なりに作文してみたが、仮説の検証がなお不十分で信憑性を欠ぐ点が多く、その真実は居士のみぞ知るである。

しかし、それはともあれ、読者のみなさんが、私の拙文を読まれて明治二十八年の居士の須磨―松山―奈良の旅を偲ぶならんかの動機となれば私の甚だ幸せとするところである。最後に、適切な御指導をいただいた愛大教授和田・蒲池両先生並びに有効なる資料を提供してもらった各位に厚くお礼申します。

別表、日程表（奈良・大阪は推定）

明治二八・四・一〇	日清戦争従軍、宇品港発。
五・二三	和田岬上陸、従軍解除、神戸病院入院。
七・二三	同病院退院、須磨保養院入院。
八・二〇	同保養院退院。松山へ帰郷。
八・二二～二四	広島、飄亭下宿泊。
八・二七～一〇・二七	愚陀仏庵、漱石と同居。
一〇・一九	三津港発、広島へ。
一〇・二一	須磨再訪。
一〇・二二～二三	大阪、駅前旅館泊。
一〇・二四	大阪、今井医院。
一〇・二五	大阪、仙田重邦下宿泊。
一〇・二六	奈良、角定旅館泊、東大寺中心に見学。
一〇・二七	〃 〃 薬師寺中心に見学。
一〇・二八	〃 〃 法隆寺中心に見学。
一〇・二九	大阪、仙田重邦下宿泊。
一〇・三〇	大阪発。
一〇・三一	東京着、根岸子規庵へ帰着。

参考文献資料

子規全集2・6・12・22・その他	講談社
正岡子規（人と作品）	松井利彦
子規諸文	山口誓子
子規の須磨にありし時	天岸太郎
「柿くへば……の旅の宿」	古賀藏人
子規居士と余	虚子
神戸市文化教育課資料	
角定について	角谷とき子談
（昭和五十三年十二月 例会講演）	（松山子規会幹事）

子規と寺田寅彦

弘田義定

寺田寅彦が東京根岸の家にはじめて正岡子規を訪ねたのは明治三十二年九月である。当時のことを寅彦は「明治三十二年の頃」と題して、昭和九年九月の「俳句研究」に載せている。その冒頭に次の如く書かれてある。

「明治三十二年に東京へ出て来たときに夏目先生の紹介ではじめて正岡子規の家へ遊びに行った。それと同時に『ホトトギス』といふ雑誌の予約購読者になったのであったが、あの頃の『ホトトギス』はあの頃の自分にとっては実に此上もなく面白い雑誌であった。」（原文のまま）

このときの「ホトトギス」は、明治三十一年八月に第二〇号を出したあと、発行所を松山から東京に移してまだ間のない時分のものである。編集は高浜虚子、表紙は中村不折らが描いたものを使っていて、寅彦はその斬新な表紙につよく心を引かれたこと、また開汁会、柚味増会の奇抜な記事などもおもしろかったと述べている。もちろん寅彦はこの初訪問に際して、子規から手もとにあった「ホトトギス」を見せられ、すすめられるままに結局「ホトトギス」に参加、予約購読者になったのである。

ところで、寅彦が根岸庵へ行ったのはいつかということになると、これはやはり寅彦自筆の「根岸庵を訪ふ記」にもっとも詳しい。この文章は、明治三十二年九月、子規をたずねた直後の執筆であるけれども、ゆえあって生前は未発表のままになっていたものである。寅彦没後、岩波版の第一次寅彦全集が刊行された折り、第一巻随筆篇の巻頭に掲載、はじめて世に出た文章であり、それを読むと「九月五日」に根岸へ行ったことがわかる。

この年、熊本第五高等学校を卒業した寅彦は、さらに東京大学に受験のため九月上京、京橋あたりに宿をとった。宿屋ではなく、かつて父親が東京に勤務時代の知人の家か、そこところは定かでない。とにかく、寅彦はその九月五日に上野動物園を見るつもりで京橋の寓居から鉄道馬車で上野公園まで行った。たまたま目的の動物園は休みであったため、予定を変えて、熊本を出る折りに漱石から紹介されていた子規を訪ねた。ようやくのことに下谷根岸の嵩横丁に探しあてた子規の家の門前に立った。訪問記の一部をここに抜いてみよう。

「―黒い冠木門の両開き戸をあけるとすぐ玄関で案内を乞ふと右脇にある台所で何かして居た老母らしきが出て来た。姓名を告げて漱石師より予て紹介のあった筈であることなどを述べた。玄関にある下駄が皆女物で子規のらしいのが見えぬのが先づ胸にこたへた。(圏点は筆者)外出と言ふ事は夢の外ないであらう。枕上のしきを隔てて座を与へられた。初対面の挨拶もすんであたりを見廻した。四畳半と覚しき間の中央に床をのべて糸のやうに瘦せ細った身体を横たへて時々咳が出ると枕上の白木の箱の蓋を取っては吐き込んで居る。蒼白くて頬の落ちた顔に力なけれど一片の烈火瞳底に燃えて居る様に思はれる。左側に机があつて俳書らしきものが積んである。」(圏点は筆者)

病床に身を横たえている子規の印象を寅彦はこのようにいともつぶさに書きとめている。たとえば糸のように瘦せたからだ、そして時々白木の箱に痰を吐きこむ姿など、これほど鮮烈な観察の中にあつて、子規の眼底に燃えるような一片の烈火を見逃していない。病子規の体内に潜在する旺盛な気魄、子規の生前によく言っていた勇猛心のいろめきであるうか。玄関に女物の下駄ばかり並んでいるのが胸にこたえたとも述べていることと思ひ合わせて、後年の卓抜した科学者としての鋭い推理力と観察眼、また随筆の名手として「吉村冬彦」を生んだ片鱗がこの一文からうかがわれるような気がしてならない。

鴨居にかけられた筈と簀、その筈には「西方十万億土順礼西子」と墨書。右側の障子の外は小園、数株のはぎ、けいとう、おしろいの花が隠れてよくは見えなかつたこと、根岸庵の近くを汽車が通ると、つくつく法師の声やんだりしたことも寅彦はいいねいに綴っている。そうした子規・寅彦対談の為に老母(八重刀自のこと)が運んできた珈琲は寅彦に、子規は牛乳を飲んだと記されているからして、刺激のつよい珈琲は子規が避けていたかもしれない。「仰臥漫録」の食事日記を読んでも、ココアは時々飲んで居るが、珈琲を飲んだというのは見あたらない。

この二人が話しあっているさい、子規は中村不折の作品を何点か取り出して見せた。絵ごろのあつた寅彦も「私も絵は大へんに関心があります。いつか不折氏の作品をもらつて下さい」という意味のことを告げて、子規もその無心を肯いてくれたとも記している。かくて寅彦は夕方の六時近く根岸を辞去、浅草へ行く予定をやめて京橋に帰つたのである。時に子規三十三歳、寅彦二十二歳であつた。

実はこの根岸に訪問する直前、寅彦は偶然にも高浜虚子に道で出会っているのだが、そのときは双方名乗らずにわかれている。これも九月五日のこと、寅彦は子規の家をさがしながら鶯横丁の近くにあつた前田邸の門前で一人の青年に会つた。その頃流行の鍔のひろい中折帽を被つて縞の羽織、それでいてゴム靴をはき脇に折カバンを抱えている。そうして非

常にゆっくり歩いてくる姿に「これが虚子という人ではないか」と直感した。その後再び寅彦が子規の家を訪ねたとき、

さきに前田邸の前で、「虚子ではないか」と直感した当の虚子と初対面のあいさつを交しているのである。

ここで話が前後するけれども、はじめて根岸庵に行った寅彦は子規の写生した熟柿の図を見せられた。この熟柿の横に虚子曰く「馬の肛門のやうだ」という意味のことが書いてある。思はず寅彦が笑つたところ子規は「いや本当にそう思つたのだから面白いのだ」と虚子評を弁護したとある。もとより寅彦の師は夏目漱石であるが、ここにまた子規・虚子・寅彦の結びつきが生まれて、「ホトトギス」を舞台上にユニークな随筆家としての寺田寅彦の誕生を見るに到るのである。

「ホトトギス」に寅彦が最初の短文をよせたのは明治三十二年の十月号、ペンネームは科学者らしく牛頓(ニュートン)の名を用いた。次いで十一月号に「祭」を発表した。明治三十三年九月号には「車」の一文を載せた。子規はこれを読んだ寅彦の才筆を激賞した。この短文は人力車で東海道を西下した折りのことを書いたのであるが、その中で車夫の走るたぎに冠っている検査の道にうつる影が椎茸のように見えたという写生文、この「椎茸のように見えた」という捉えかたが大へんにうまいといって子規はほめちぎった。そんなことがあつてから、寅彦は子規に会うと「椎茸のような文章はない

か」とよく言われたそうである。

東海道西下の文章に触れた機会に、一応、寺田寅彦の略歴を紹介しておくことにする。父は旧土佐藩の土族寺田利正、寅彦はその長男として明治十一年十一月二十八日、東京麹町区平河町三丁目に生まれた。当時父利正は陸軍會計監督として各地の師団を歴任、あたかも東京に在勤中に寅彦が生まれたのである。明治十九年陸軍を退役、郷里の高知市大川筋の寺田家に定住することになり、人力車で一家そろつて東海道を下つたわけである。寅彦九歳、車上にゆられながら大阪までの道中、この思い出が「車」の文章になつたわけである。

父に伴われて帰郷した寅彦は、高知県立尋常中学校を卒業したあと熊本第五高等学校に入学、折りふし松山中学から五高教授にむかえられた夏目金之助(漱石)と特に深い接触を持つことになる。それは学科の上だけではなく俳諧の道でも師弟関係がうまれて、いわゆる寅彦の俳諧の基盤がつくられていくのである。その後明治三十六年には東京大学の物理学科を出て理学博士になる。明治四十二年ドイツおよびイギリスに留学して地球物理学を研究、明治四十四年東大教授として多くのすぐれた子弟を養成した。その間、学界に報告された専門の論文は実に二百余篇に上り、いずれも独創的な卓抜の内容を持つ論文は世界の学界を刺激した。ツバキの花がうつ向きに落ちる原理を力学的に解明した挿話など有名である

が、風水害の起こるたびに、誰でもが今に思い起こすのは、災害は人の忘れた頃にやってくる」といしましめた彼の言葉である。

再び「ホトトギス」に話を戻して寅彦の文章に移る。子規の激賞した短文「車」あるいはそれ以前の「星」「祭」はいずれも東大の学生時代の執筆である。元来、文章を書くことの好きであった彼が、随筆家として周辺の注目をあつめるようになったのは「団栗」の一篇である。明治三十八年四月号の「ホトトギス」に発表、大学を出て足かけ三年間のことである。「このとき、はじめて原稿料をもらった」と虚子追憶の文章の中に寅彦は書いている。当時はまだ大学講師の資格で月給三十五円、それに父の仕送りをうけ家庭を持っていたが、けっして生活は楽なものではなかった。思いがけぬ「団栗」一篇の原稿料は寅彦にとってありがたかったはずである。

(昭和五年四月改造社版虚子全集月報「私と高浜さん」参照) 寅彦は学生時代、すでに妻女をもらって一戸の家庭を構えていた。「団栗」は、その妻女が突然血を吐いて病床につくが、医師の手当てをうけて軽快に近づく、そこである日寅彦は妻女をつれて植物園にあそぶのだが、久々に二人ですごす時分をよるこんだ妻女は、落葉の上にごろがっているどんぐりをハンカチに包み切れなくなるまで入れて「拾うことが大へんにたのしい」と寅彦に言ったりする、その妻女も遂に亡くな

写生文の「車」では寅彦の鋭敏な観察眼に子規が瞠目した。このようにして子規は折りあるごとに寅彦の文章を促し激励もした。

「生来書くことに趣味を持っていたところへ正岡子規を中心とする写生文に刺戟を与へられて磨きかけられたものと思われる。この意味で漱石が寅彦の父であるとするれば、子規は寅彦のをぢさんぐらゐには当たつてゐるであらう。」

寅彦門下の一人である矢嶋祐利氏はこんな風にも評している。もとより寅彦の文章のうまさについては持って生まれた天稟のなすところも大きかったであろうが、それに併せて「ホトトギス」をめぐる人々、なかんずく子規の影響が寅彦の文章をつちかう力になったことを見逃がすわけにゆくまい。これは寅彦にとって容易に得がたき幸運であつたと思う。熊本五高時代のつながりによって、漱石と寅彦の師弟関係は第三者の想像を許さぬまでに深いものがあつた。同時に漱石を通じて子規を知り、俳諧の上でも文章の上でも子規の与えたものが寅彦の血となり肉となつてゐる事実を改めて見直すとき、漱石・子規と寅彦の間にむすばれた三角関係は、明治から大正にかけて育てられた文化の推進力でもあつた。

終わりに、子規の名が出てゐる寅彦の日記を次に抄録して、二人のあいだに醸された温情の交流をしのぶよすがとしたい。

ったのち、わすれがたみの六つになる幼い子をつれて思い出の植物園に来てどんぐりを拾わせるといふ内容のものである。いかにも寅彦らしい誠実な男の気持ちと、ひそかに亡妻の面影を追うしんみりとした調子の文章に心を打たれる。いわばこの「団栗」こそは寅彦の出世作ともいふべきであらう。

この「団栗」を発表の際にはじめて寅彦の名を使っている。途中でしばしば「藪柑子」のペンネームも用いているが、彼をいよいよ有名にした「吉村冬彦」のペンネームを使うようになったのは大正九年十一月の「中央公論」に載つた「小さな出来事」からである。寅彦の家はもと吉村という姓であつたのを、途中で寺田という家から養子をむかへ、その後火災のために系図など焼失、それでどうかしたはずみに養子が実家の寺田を名乗るようになった。それで寅彦は旧姓吉村を筆名にとり、冬彦は冬(十一月)に生まれた男の意味である。

「団栗」以後「竜舌蘭」「嵐」「森の絵」「枯菊の影」「花物語」「まじりか皿」など次々に名篇を執筆、文名を高めて行くのであるが、これは小文のテーマではないのでくわしく述べることを差しひかえたい。その替りに寅彦の文章について正岡子規の与えた影響というものを考えてみたい。

寅彦が子規と初対面の際、さっそく「ホトトギス」を膝下に示されて文章を書くように誘われている。そして間もなく寅彦は牛頓のペンネームで短文「星」を書き、引きつづき「祭」を書いて、いずれも「ホトトギス」に載つた。同じく

明治三十三年

八月二十六日(日) 晴 形ばかりの祖神祭をなす。壇に

白布を敷き、梨、水桃、葡萄、バナナなどを供へまつる。枝豆と手製の鮎に葡萄酒もあり陶然として酔ふ。風鐸鳴る。漱石師来り共に子規庵を訪ふ。谷中の森に鯛鳴いて踏切の番人惚け顔なり。

明治三十四年

一月一日(火) 温 中村先生方では屠蘇、子規子の処で

も屠蘇。蕪村忌の写真を見る。一昨年の蕪村忌には子規子も庭で一同と一処に写つてゐるが、去年のには別に室内で椅子によつた処を写してゐる。

明治三十五年

五月十九日(金) 晴後雷雨 欄外に「午前一時吾正岡子規逝く。悲哉。昨日はその誕辰なりし。」

九月二十日(土) 快晴 朝新聞にて子規師の訃に接す。昨日所々へ端書認むる序に師へも絵葉書にても送らんかと思ひつつ止みしが、その時は既に此世の人ならざりし。早くより上京しながら生前今一度の面会得ざりしこそ口惜しけれ。

九月二十一日(日) 晴 朝新聞を見れば今朝九時子規子の葬式ある由故不取敢行く。御院殿の踏切を越ゆる時行列に出会ひ其俣従いて行く。夏目先生代理として湯浅君も会葬せり。(筆者註「漱石滯英中」) 田端大竜寺にて焼香。立上る香煙。読経の声そぞろに心を動かして楯の前に君が面影を思

ひ浮かべぬ。

寺田寅彦。昭和十年十二月三十一日、東京市本郷区曙町二十四番地で死去。享年五十八。墓は高知市郊外久万(旧初月村)にある。

(昭和五十四年一月例会講演) (松山子規会顧問)

### 編集の窓

著作

- 霽月句文集 村上幸太郎著 同翁生誕百年祭実行委員会発行 昭和五三年一月三日 A五版 五六九頁 四、〇〇〇円
- 極堂俳句稿 柳原極堂著 同稿頒布会発行 昭和五三年一月 画仙紙使用オフセット印刷 B五版 和装美本 四、〇〇〇円
- 子規文学論の研究 室岡和子著 桜楓社発行 昭和五三年一月三日 A五版 二二二頁 二、五〇〇円
- わが愛する歌人 第四集(中に宮地伸一「私の子規体験」) 有斐閣発行 昭和五三年一月 五〇〇円
- 伝記正岡子規 愛媛大学文学研究会編 松山市教育委員会発行 昭和五四年二月一日 B六版 三〇一頁 一、〇〇〇円
- 「俳句とエッセイ」正岡子規特集号 昭和五三年一月月号

平井照敏「子規の持つ闇」、上村点魚「正岡子規居士の絵にふれて」、成瀬桜桃子「子規の墓」、星野麦丘人「晩年の子規」など。

論文

随想「子規は生きている」 弘田義定 「伊予史談」二二二

一、二合併号

- 小川尚義と正岡子規 和田茂樹 「星」昭和五四年一月号
- 小川尚義と松山中学 和田茂樹 「星」昭和五四年二月号
- 幻の「山形新聞」を求めて 蒲池文雄 「愛媛アララギ」一月号

子規と漱石 桶谷秀昭 角川書店「俳句」昭和五四年一月号

河東碧梧桐と富田溪仙 成瀬桜桃子 「愛媛新聞」昭和五三、二二、二八

父極堂 柳原正春 「愛媛新聞」昭和五四、一、二四より 二十一回

子規会誌 一号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 昭和五四年四月一日

編集発行 松山子規会

印刷所 青柳堂

松山市末広町正宗寺内  
松山市東長戸二丁目一ノ三十九

#### 分店・各出張所のご案内

外商係員が活躍いたしております。あらゆる用途には、子規和島分店、いよてつそごう各出張所をお気軽に利用くださいませ。

■宇和島分店 御幸町二丁目(0899595555) 外商係員 斎藤

■八幡浜出張所 矢野町七丁目(0894231001) 外商係員 菅野・安井

■サンパール出張所 御荘町平城(0895725554) 外商係員 河野

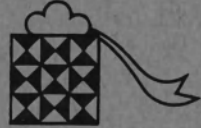
■大洲出張所 中村(0896633525) 外商係員 菊野

■今治出張所 別宮町二丁目(0894310240) 外商係員 藤原・中村

■新居浜出張所 一宮町二丁目(0897330732) 外商係員 竹内・白石

■伊予三島出張所 中央一丁目(0896644612) 外商係員 田中・古森

きょうもあなたと素敵な一日  
いよてつそごうです



## 先さまに お買物の楽しさをお届けします 商品券の贈り物

先さまのお買物のトキトキにあなただも一緒することになるのです  
500円から50000円までの9種類を各種セットいたします  
そごうグループ・分店・各出張所共通でご利用いただけます  
〈商品券の(有効命)は1階商品券売場(48)2411と4階(進物相談所)48(2422・2423)で承っております

素敵なシテイライフ



いよてつ  
そごう  
松山・市駅



四国特産の生柚子の 香り高い

四国名菓



一六タルト

■お召しあがりやすいようにスライスしてあります。

一六本舗

本社 松山市東石井町166-1  
☎ 0899-57-0016

楽しいお食事処

かまくら

松山市小栗3丁目  
大誠ビル正面  
電話 (32) 3292番

子規の一生を描く 青少年・一般向き

伝記 正岡子規

松山市教育委員会編 B6版 300ページ

松山市文化財協会編 定価 1,000円

野村朱燐洞拾遺

鶴村松一編著 B6版 240ページ 1,500円

松山市小栗6丁目3-23 青葉図書 ☎(0899) 43-1165

¥ 300